



の中の

子どもたち

第14回 くちづけ

—間違ってもやしないか、この物語—

川崎 二三彦

絶賛

本連載で、私がいつも末尾で紹介しているのが映画案内 coco のホームページ。「Twitter から映画の評価が分かる & 映画の鑑賞記録が残せる」という謳い文句で、ほとんど全ての映画が網羅されており、今回取り上げる「くちづけ」も例に漏れず、下図のとおり(2013年9月8日現在)、圧倒的に高い評価を勝ち得ていた。



ちなみに、もう一つの映画ガイドである「Movie Walker」でも、最高評価の星5つが4割を超えて最も多く、平均でも4.2と高い。寄せられた声も、「多分今年一番の映画。傑作です! さすが、伝説の舞台といわれるだけあって脚本がいい! 久しぶりに上映後化粧直しが必要なほど泣きました」だとか、「こういうの(注: Movie Walkerの評価やコメント)は参考にさせて頂く事はあってもレビュー投稿などしない私が、どーしても投稿したくなってIDを取ってしまいました……。それぐらい良い!!!」「ボロボロに泣くしかないのですが、見終わったあとスッキリして清々しい気持ちになれるのは、



愛に溢れた物語だからでしょうか」といった絶賛で溢れかえっ

ていた。

「ウウム、伝説の舞台の映画化なのか」「評判もすごく良いし、タイトルも何となく好ましい」

迷わず私も出かけることにした。

ちょ、ちょっと待ってくれ

映画は、知的障害者のグループホーム「ひまわり荘」を舞台に、そこで暮らす人々やホームを支える人たちの日常を、時にコミカルに、時にはシリアスな問題も投げかけつつ描き出していく。中心となるのは、早くに妻を亡くし、最近このホームにやって来たその名も「愛情いっぱい」という漫画家と、彼が男手一つで育ててきた障害をもつ娘マコ。映画のスタッフやキャストが実際のグループホームを取材もして作り上げたという本作は、障害者差別にかかわるエピソードや、簡単にはいかない彼らの現実生活も織り込み、ものすごく感動的というわけではないとしても、それなりに了解できる内容で進行する。

だが、映画がクライマックスに近づくにつれ、私はいやな予感に襲われた。事前にストーリーは見ないようにしていたのだけれど、この展開ならば、どうしたって先が読めてしまう。

「やめてくれ」「ちょっと待てよ、おい!」

という心の声もむなしく、物語は最悪のコースを辿るのであった。

「親子心中」の研究

ここ数年、私は「親子心中」に関する研究をおこなっており、古くは戦前の時代を含むさまざまな文献を集め、さらに新聞報道を整理して最近10年間の全ての事例を把握。加えて、子どもが死亡し親が生き残った事件の公判

を傍聴するなどして、事例の詳細な検討も試みている。

ところで、子どもを殺した被告側弁護士が、公判の中で必ずと言っていいほど用いるのが、「被告には、子どもに対する愛情があったからこそ、こうした行為に及んだのです」という理屈だ。実はこれ、戦前からわが国に根強く存在しており、たとえば、「親が自分の最愛の愛子を殺して心中を凶るといふ行為は日本人としてその肉親を愛さんとする一つの最も美点の現れであるとも見られます(昭和9年)」といった発言は、その一例であろう。

ただし、公判を傍聴すればするほどに感じることは、「親子心中」、つまり「子殺し心中」は、どのようなものであっても、子どもにとっては理不尽きわまりないということだ。だから、「わが国の歴史においては、児童の人権を抹殺した親子心中という言葉が安易に用い、美化し許容してきた」として、多くの研究者が「心中」という用語の使用そのものを避けている。

子どもの無念

もちろん、事件は起こる。古今東西、つまりは洋の東西を問わず、過去から現在に至るまで「子殺し心中」事件は発生し続けている。だから、「ひまわり荘」での生活を映し出す前半部分からするとかなりの違和感は否めないものの、諸般の事情が重なり、追い詰められた父親が娘を殺すしかないと考えた物語があっても、もちろんよい。

だが本作では、「愛情いっぽん」という命名が象徴しているように、まさに「肉親を愛さんとする一つの美点」というとらえ方に傾き過ぎて、<子殺しの理不尽さ>という視点がほとんど感じられないことだ。換言すれば、「ウーヤン」との結婚を夢見、「殺さないで、お父さん!」という内心の叫びを聞き届けられないまま殺害されたマコの無念さが、いっぽんの「愛情」に隠され、置き去りにされているようにならないのである。

想定外



しかも腑に落ちないのは、子を殺害した父親が、いかに余命幾ばくもない状況であったとはいえ、私の想定と違って「心中」を凶ろうとさえしなかったことだ。むろん、「死ぬ」というわけではないが、あえて作者に聞きたい。

「娘を殺めた上で、父親は余命を全うし、マンガを描くんですか」「娘がウーヤンと結婚するのは、はなから論外だったんですね」と。

蛇足だが、この展開だと、障害者同士の結婚なんてあり得ないということが暗黙の前提にあると読めてしまう。

そんなモヤモヤが頭をかき乱したのであろう、号泣した人には誠に申し訳ないが、映画館を出た途端、私は思わず毒突いてしまった。

「××××」(4文字伏せ字)

*

なお、妻を亡くして父子家庭で障害児を育てる父が、癌で余命がないことを宣告されて呻吟する映画なら、中国・香港映画「[海洋天堂](#)」と瓜二つ。こちらは心中未遂から物語が始まるのだが、本作と比べてみるのも一興だろう。

* 2013 / 日本

* 鑑賞データ 2013/06/14 横浜ブルク

* 公式 HP <http://www.kuchizuke-movie.com/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/20982>

第1回	プレシャス	* 題名を click すると 本文へ移動します。
第2回	クロッシング	
第3回	冬の小鳥	
第4回	その街の子ども	
第5回	八目目の鱗	
第6回	いのちの子ども	
第7回	ラビット・ホール	
第8回	サラの鍵	
第9回	少年と自転車	
第10回	オレンジと太陽	
第11回	孤独なツバメたち	
第12回	明日の空の向こうに	
第13回	旅立ちの島唄	